



いりめん うみ かに しぜん 豊かな島、種子島。なんかい う この小さな島には、時に、国の
れきし やる で 事 こと かずおお さんざい
歴史を揺るがす出来事が数多く存在します。

とき え ど じだい ぜんはん せいき こうはん 全国ん かくち しょうろう 飢饉に襲われ、人々は苦しい
けいかつ し たねがしま おな ひとびと けんめい けいかつ
生活を強いられていました。それは、種子島とて同じこと。それでも、人々は懸命に生活し
ていました。

とき とうしゅ たねがしま ひさもと どうにかして とうみん せいかつ 島民の生活を豊かにできないか考えました。



ある日、久星は「甘藷」という食べ物の存在を目にします。甘藷は、育てやすく、たくさん生産でき、おまけにおいしいとの噂がありました。

「甘藷があれば、飢饉でも苦しまなくてすむ」と久星は考え、琉球の尚貞王より、甘藷1籠を譲り受け、家老西村時乗に栽培を命じました。これは、1698年（文禄11年）の出来事です。



とき乗は、ある農家に甘藷の栽培を託します。下石寺の農民、休左衛門です。一心の期待、島の命運まで背負った休左衛門は、不安の募る中、甘藷の栽培をスタートさせます。

甘藷栽培は、もちろん初めてのこと。それでも、肥料をやり、草を取り、一生懸命育てました。甘藷はみるみる育ちました。しかし、どういふことが実ができません。休左衛門は、茎から実ができと思っていたのです。実ができないまま、時は刻々と進んでいきました。



いっしょうけんめいをだ かんしょ ぎゅうざ えもん み くき す
 一生懸命育てた甘藷でしたが、休左衛門はとうとう実のできない茎を捨てることにしま
 くき ひ め しゃんかん ぎゅうざ えもん め まる おどろ ね さき
 す。茎を引き抜いたその瞬間、休左衛門は目を丸くして驚きました。なんと根の先には、た
 み つ
 くさんの実が付いていたのです。

さいばい え さと けいこう ほうこく う ひさもと たいへん よろこ ひさもと かんしょ ぎゅうざん ちから
 栽培は見事成功。報告を受けた久基も大変喜びました。さらに、久基は甘藷の増産に力を
 きき かんしょ どうじよう くる き せん かいほう
 注ぎました。甘藷の登場によって、さんざん苦しめられてきた飢饉から、人々は解放される
 ことになったのです。



いつしか、種子島では「甘藷」のことを「からいも」と呼ぶようになります。

久屋は、人々から「からいもの神様」と崇められ、現在も栖林神社に祀られています。

休左衛門はこの功績により、農民では異例の苗字を付けることを許され「大瀬」と名乗りま
す。また、褒美として休左衛門夫婦の寿碑も与えられました。現在でも、地域の住民に大切
にされています。

甘藷が飢饉から人々を救った出来事は、全国に知れわたり、種子島から、甘藷は全国に広
がっていったということです。